

20210708 区民版子ども・子育て会議 zoom

「今こそ外遊び」

参加者数：最大85画面（申込115名）

松田：次世代育成支援計画づくりのころ、地域の声を聞いてほしいもともとは地域別懇談会として開催していた。平成27年に子ども子育て会議が始まり、平成26年には毎月開催していました。懇親会しながら、立場を超えて話す場をつくってきた。

今年度初めての開催。

今日は外遊びとして話しますが、子ども若者部の部長さんにご挨拶をお願いします。

副区長室から中村副区長と柳沢部長からお話いただきます。

柳沢部長：意見交換できることを楽しみにしています。

中村副区長：5年ぐらい前に子ども・若者部部長をしていました。今はワクチンを頑張っているので11月には実際に会えることになりたいと思います。

松田：区民版のおもしろいのは、普段なかなか話せない方とも話せることです。

今日のテーマは「外遊び」

子ども子育て会議に外遊びの部会を公式につくるなど先陣きって進めている自治体。

子どもの子育て家庭のための施策として、児童課がどのように進めているか聞きたいです。児童課の須田課長からお願いします。

児童課長：須田と申します。世田谷区の外遊びの推進について話したい。

世田谷区では、住民の皆さまが中心となって全国で初めて昭和54年度に羽根木プレーパークを羽根木公園に整備して以来、世田谷プレーパーク、駒沢はらっぱプレーパーク、烏山プレーパークを4か所開設し、住民と協働による自由なあそび場として子どもたちの創造性や危機回避能力、自己肯定感などの育みや社会性、リーダーシップコミュニケーション能力の向上などを目的として取り組んできた。

砧地域にはプレーパークがなく、プレーパークを作りたいという砧小学校と鎌田児童館幼児サークルの保護者の方々が集まり意見交換したのが始まり。多摩川の河川敷にきぬたま遊び村を住民と開設し、現在委託事業となっている。

子ども計画第二期後期計画において、重点政策のひとつとして「子どもが地域の中で自らが生きる力を育むことを支える」を掲げているが、その中で子どもの外遊びの推進及び環境整

備という項目を設けており、全ての子どもに自由で主体的で創造的な外遊びの機会を保障するため、砧プレーパークの整地を始め乳幼児から身近な場所で生き生きと外遊びができる環境を整えるということにしている。

区民、地域、活動団体、関係機関などのネットワークを図り、子どもや保護者、地域の効果的な外遊びの普及啓発を協働して行うとともに、外遊び推進委員を活用して様々な関係づくりを進め、外遊びを理解し協力する地域の大人を増やして地域全体で子どもの外遊びを見守り、それを支える環境をつくることとしている。

新型コロナウイルスの感染拡大により、事業の拡充が難しい状況ではあるが、外遊びの重要性が再認識されていると考えているので、今後も地域の関係される方々と連携して外遊びを推進していきたいと考えている。

具体的には、外遊びの拠点として砧地域へのプレーパークの開設に向けて、外遊びプロジェクト世田谷の皆さまと一緒に取り組んでいる大蔵総合運動公園のプレーパークとして想定されている場所で、「砧地域にプレーパークを作ろうネットワーク」の外遊び事業を実施して、年々実施開設を増やし、今年度は週3回の定期開催、年60回を予定している。

今後、砧地域の新たなプレーパークの設置にむけて、機運を盛り上げ、砧地域の外遊びを支える担い手の発掘、育成のための啓発に取り組むとともに、開設時期や運営体制と具体的な方策についても協議をすすめていきたいと考えている。

次に身近で自由に外遊びができる機会の場の拡充についてですが、小さなリヤカーに遊具を積んで、身近な公園に仮設のあそび場をつくるプレーリヤカー事業を実施している。主に、乳幼児、未就学児を対象として、土、泥、水遊びやままごと遊びなどを地域の団体が主体となって行っている。できるだけ、区全体で空白地帯をなくなるように拡充しながら取り組んでいきたいと考えている。

補助事業として、プレーカー事業を実施しているが、遊び場が必要と思われるエリアの多摩川野毛町公園や二子玉公園といった比較的大きな公園にバンに遊び道具を積み込んで出向いている。遊びの出前を通して、多世代のコミュニティを大切に活動を行っている。

きぬたま遊び村は、現在週4回実施しているが、プレーワーカーを中心に原っぱ遊びや川遊びを実施している。継続して運営を行っているが、今後は実施回数の拡充も検討していきたいと考えている。

次に子ども推進委員についてです。現在の計画の前の子ども計画第2期の重点政策に子どもの生きる力の育みにおける外遊びの推奨を具体化するために、子ども子育て会議の部会として、外遊びや子育て支援に関わる区民、行政、学識経験者で構成する外遊び検討委員会を設置した。外遊びネットワークを作って、外遊びの大切さを伝える活動の充実を目指す外遊びプロジェクトを始動しようということで、外遊び検討委員会設置後に任意団体として、外遊びプロジェクト世田谷が結成されて、外遊びの推進や全区的に外遊びを啓発する取り組みを行っている。

プロジェクトでは、外遊び推進委員を指定し、身近な地域における外遊びの現状把握、情報共有及び地域ネットワークづくりに取り組んでいる。

児童館ごとの外遊びマップ調査を行い、地域と課題を共有し、課題解決に向けたネットワークづくりに取り組むこととしている。外遊び推進委員が地域の中で外遊びを見守り、子どもたちの外遊びの機会を作りたい人をつなげ、外遊びの啓発や地域人材の発掘や育成を行うことにより、地域の外遊びの機会の拡充していきたいと考えている。

具体的には外遊びプロジェクトの外遊び推進委員が、下北沢駅前とか松陰神社前商店街などの道遊びの取り組みに積極的に関わるなど、地域の外遊びを推進している。

最後に外遊びの啓発推奨と地域で見守り、支える機運の情勢ですが、外遊びの全区的ネットワーク、地域ネットワークの強化を進め、協働して子どもの成長や生きる力を育むうえで重要な役割を果たす外遊びの大切さを、体験を通して子どもや保護者への理解を促進するとともに地域の大人にも外遊びの理解を深め、地域で子どもたちの外遊びに協力したい、見守りたいと考える大人を増やし、子どもの外遊びを支える機運の状況をはかることとしている。

昨年度はコロナ禍の中で全区ネットワーク会議をオンラインで行うなど、これまでとちがった形にはなったが、今後も子どもの外遊びの機会を広げられるように取り組んでいく。コロナ禍の中で、子どもたちの遊びの機会は少なくなり、子どもたちが思い切り外で遊べる機会を充実することは、ますます重要になっていると考えている。

一方で、区民の生活様式も変化し、日中も在宅している大人の方々が多くなっている。このような状況の中で、子どもの外遊びの大切さを地域住民の方々に理解していただくことがますます重要で不可欠になっている。世田谷の外遊びを支える皆さまと協力して取り組んでいきたいと考えているので、これからもよろしく願いいたします。

松田) ありがとうございます。児童課の須田課長から全体的な世田谷の計画についてお話をお聞きしました。おお!と思う項目もあったのではないのでしょうか。これを実際に実現する

ためには地域の私たちが実際に動いていかなきゃいけないこともあるかなと思っています。今日は外遊びに関わる本当に多様な皆さんが参加しています。外遊びプロジェクトという活動をとおして、今5つめの砦のプレーパークを、私は外遊び拠点と言っていますが、新しい考え方の拠点を作りたいと準備をしている。

外遊び推進委員のカンペーさんは日本で一人しかいません。

外遊び推進委員をしている神林です。東日本大震災後の宮城県の気仙沼で、子どもの心の居場所ケアとして、子どものあそび場づくりをしていた。2年ほど前から、世田谷で外遊び推進委員として、子どもの外遊び環境の充実を図るような活動をしている。

いろいろな方々と一緒に、子どもの外遊び環境を盛り上げるようなことをさせていただいている。今日も、先ほどまで祖師谷のいたのですが、コロナのこともあり、夏休みの子どもの居場所をどうするんだ、と悩んでいる人が多い。これからもよろしくお願いします。

松田) ありがとうございます。せっかくなので、いろいろな世田谷での活動を紹介してもらいたいです。今どんな感じかというのを少しずつ教えていただけると嬉しいです。

それぞれの地域でみえてきている子どもの姿を1, 2分をお願いします。

まずは世田谷の初めの一步だったふれせたの皆さん、どなたがお話してくださいますか？

天野です。

羽根木プレパークは1979年に日本で最初の冒険あそび場として始まった。

最初に常駐したプレーワーカー。昔はプレーリーダーという言い方をしていた。子どもの外遊びを全国的にひろげようと活動してきている。

やればやるほど、子どもに外遊びは欠かせないと確信というか、非常に強く思っている。プレーパークは理想ではなくて、具現化している。ああいう活動が現代でもできるのであると。

地域住民(転入住民)とのトラブルがあり、厳しいのが実情。外遊びを推進しようとしたら、子どもの声へのクレームとの闘い。役所が外遊び推進をするというのであれば、そういう声にしっかり対峙してもらわないと進められない。素晴らしい取り組みだと思っているので、役所がやれることをやってほしいし、僕らがやれることはやらないといけない。

やはり大人がつくっている環境だから、子どもが育ちにくいのは大人の問題。静かに遊べというのは、大人の逃げ腰なやりかた。大人がちゃんと声をあげて、いろいろ言う大人たちとしっかり取り組んでいく必要があると思っている。そういう意味でここにいる方たちは非

常に心強い、同じ思いを抱いている方たちだと思うので皆さんと共に歩いていけたらいいなと思っています。ふれせたもピンチもいろいろあるので、助けてください。

松田) クラウドファンディングもおめでとうございます！リーダーハウスも早く見に行ってください。

プレーパークは緑、続いて青の活動として多摩川にあるきぬたま遊び村の話をお願いします。

きぬたまプレーワーカーです。

青のあそび場ということで、川遊びと今の現状とこれからの取り組みをお伝えします。

多摩川の川遊びは毎年7月の終わりから8月いっぱい。

去年は例年と比べ3, 5倍の参加。一昨年までは一番多くて50名くらい。去年は170名の参加があった。区外(目黒区、板橋区)からも自然な遊びができないなかで、あそび場を探してきた人が多かった。

今年は22日から始まるので、今年もどんな様子なのか、子どもたちがどんなことを求めているのか、親御さんたちがどんなことに悩んでいるのかをヒアリングしていけたらいいなと思っている。

台風19号で、河川敷が多摩川の氾濫で更地のようにってしまった。

子どもたちが大事にしてきたツリーハウスが壊れたので、今年コロナ禍で進めることも難しかったが、子どもたちのやりたいと叶えるために昨年4月と5月で、外にでれないなか、子どもたちにオンラインでコロナで緊急事態宣言があけたらどんなことしたいかをヒアリング。思い切り遊びたい、ツリーハウスに大きなぶらんこ作りたい、遊び場をもっと楽しくしたいという子どもたちの願いを聞くことができ、緊急事態宣言が明けてから、駆け足ではあったが、奥多摩に間伐体験に行き、材料から集めに行くところから始めて原っぱで持ってきた間伐材の皮をはいで、乾燥させて防腐剤をぬり、子どもたちと一緒に作り直した。4月にはお披露目会をすることができた。

大事なことだと見えてきたことがひとつだけある。

昨年学校に行けなかった小1(集団がもともと苦手)の子が、製作に関わった1年間で100人近い人前で、自分が言いたいと感想を話してくれた。子どもたちの見えない中での不安のなかで乗り越えようと課題に向き合っている姿にイベントを通して見ることができよかった。その子は今年から学校にも行くようになっている。原っぱで報告もしてくれるので第二の居場所になっている。

台風でうまったビオトープをまた新しく作り直そうと思っている。コロナ禍でイベントができない中、仲間と協力して作っていく楽しさを大事にしていけたらいいなと思っている。

コロナ禍での出産を経験された方、最近引っ越してきた方とか、孤立して今までどこにも行ってなかった人たちが、1年ぐらいたってようやく見えてきたところがあるなと感じている。乳幼児連れの方たちにも遊べる居場所となるような場としての取り組みで、月曜日の午前中を乳児の親御さんが遊びにこれるような取り組みを始めている。

広いフィールドを持つきぬたまだからこそ、日常の遊びを大切に、子どもたちのやりたいがかなえられる場になればと思っている。

松田) 外遊び関係者の年齢が上がってくる中、若者の発表は嬉しいです。  
常設でひろばとセットの「てっとーひろば」のいえもん、最近どうですか？

てっとーひろばプレリーダーです

てっとーひろばは2002年4月にオープンした子どものあそび場で、来年で20周年になる場所です。プレーパーク事業ではなく、おでかけひろば事業。

細長い敷地になっていて、高压線の白い鉄塔がたっているのて、てっとーひろばという名前がついている。藤棚が広がっていて、日陰で遊べるようになっている。奥は地面が土なので、泥遊びや水遊びを思い切りできる環境。乳幼児から小学生低学年中心のあそび場なので、環境づくりも乳幼児に目線を落として、外遊びをデビューさせる場所を探しているお母さんたちにとってはいい場所と言ってもらっている。10か月とか1才なりたての子どもたちは水や土に触れる最初の瞬間に立ち会える幸せも感じる。真ん中に建物があるので、室内で雨でも過ごせるし夏も風通しもいい。室内で下の子、外で上の子が遊んでいるのを室内から見守れる。土曜日や祭日は来園者も多く、年代いりみだれて遊んでいる。

おでかけひろば事業のため、コロナでひろば内での飲食できない。子どもは食う、寝る、遊ぶが基本だが、今は食べれない。子どもはご飯を忘れて遊んでしまうと大人が空腹になってしまう。ご飯も食べれる日常になればいいな、と思いながらやっている。

松田) ありがとうございます。

最近、道遊びをしている人たち、松陰神社の皆さん誰かいますか？

IBASHO です。

2019年に弦巻小学校のPTAサークルとして、学童卒の保護者が中心になってサークルを立ち上げた。外遊び推進委員のカンペーさんと引き合わせていただいたところから、外遊びというのに去年は活動を加速した。

最初の1年は学童卒の保護者たちが、子どもたちをどこで過ごさせればいいのか？場当たりの始まりから1年かけていろいろ考えていくうちに、親の問題ではなく、子どもの地域での自立だと気づく過程があり、世田谷区には豊かな外遊びの環境や居場所がたくさんある、いい環境だったと気づきがあり、駒沢はらっぱプレーパークを拠点に活動をしてきた。

コロナで何もできなくなった2020年で、何かできないかという中で、松陰神社前の商店街で子どもたち地域との協力で道遊びをした。イベントではなく、普段から道で遊びたいとか、遊んでいる姿を地域の大人たちもやさしく見てほしいという気持ちがすごくあり、子どもが遊んでいる時に何か近所の人に言われるのではないかと心配するなくこの地域では皆が遊んでいいんだよと象徴的に何かイベントとしてやりたいなというのが、松陰神社の道遊びだった。その過程の中で、外遊び推進委員のカンペーさんがもともと持っているネットワークで、地域の方や区の方とか、イベントとしての知恵をもらい、やりたいと思った時に、最短距離で実施できた。7月ぐらいにやろうとなって、12月にできた。外遊び推進委員の存在がすごくありがたかった。

松田) 実は下北沢でも始まっています。下北の状況を教えてください。

北沢おせっかいクラブです。

シモキタストリートプレイという名前で、子ども基金をいただきながら今期3期目の実施。カンペーさんに最初から伴走していただき、どんどんグレードアップして3期目。去年コロナだったが、頑張って12回実施。今年は15回予定しているが、すでに緊急事態宣言で後ろ倒しになっている。

緑のないシモキタの街で子どものあそび場を作りたいということで、色で言えば黄色という感じ。小田急線が地下に潜り、小田急線、世田谷区、北沢総合支所と一緒に開発をしている。今はやりの土管の空き地とか温泉のある世田谷代田までグリーンベルトができています。市民の声を聞きながらの開発になっている。一方で駅前に都道ができるので空き地もできている。開発がどんどん進んで、昔のシモキタらしさもなくなっているが、そのなかで、空き地を利用したのがストリートプレイという言葉でみち遊びをはじめている。

最初はピンクパークというメッシュの空き地のところで小さく芝生を敷いて始めた。段々大きくなり、去年のお盆休み3連続でしたが、改札の近くの大きな空き地でテントを張って、下がアスファルトなので、チョークで絵を描いたりなど始めた。

やってみてわかったことがプレーパークや児童館に行かない親子が来る。意外にお父さんと子どもが参加(母は買い物)。駅なので区外の通りすがりの人が世田谷区の良さを褒めて

帰る。子育て支援団体なので、乳幼児の親子が来ると、普段どこに行っているの？とか話をさせていただいたりしている。都会のどまんなかでやる道遊び、という展開になっている。最後はチョークを水で消したり、皆で芝生を直したりしている。

今回ウェーブが大きくなってきたなと思うのが、商店街の方がバックアップしてくれる。その動きから、土管のひろば（線路側の空き地）で定期的に親子イベントをできることになった。それを見ていた話題のボーナストラックが、子どものイベントが大事だと言ってきて、先月同じ日に同時開催でイベントをした。公園に子どもがいるのではなく、街で子どもが遊んでいるというのを見てもらわないと下北に子どもがいるというのをわかってくれないのはちょっと感じている。まちづくり課とか地域振興課もすごく協力いただき、今後ボーナストラックの横で新しい企画で線路の上が空き地になっていて、側道ぽくなっている。警察の許可での2番目の管理区道でのイベント。いろんなステークホルダーが協力して子どものあそび場を作っている事例として皆さんに報告できればと思います。

松田) 官民いろいろ加わっての発展がありましたね。  
プレーリヤカーの人たちいますか？

ちびたまの森茂です。

プレーパークのない地域で乳幼児が遊べる場所をプレーリヤカーでうめていくという感じ。私は喜多見の次太夫堀公園と大蔵汽車公園、岡本公園でやっている。コロナ禍で外に出られなかった親子が出てくるようになって、区外や遠くから調べて参加する方も多い。コロナが心配で出てこれない親子も結構いる。二極化している感じがある。乳幼児の外遊びの第一歩。ブルーシートにおもちゃやおままごとやバケツに水をいれるなど泥んこになって遊ぶこともあるが、若い親が抵抗ないのがいいことだと過ごしてる。

松田) プレーリヤカーは今どのくらいになっているでしょうかね？

世田谷には長年の自主保育の活動があります。自主保育の話をしてもらってもいいですか？

自主保育黒田（駒沢おひさま会）です。

就学前の幼稚園や保育園に行かず子どもたちを交代で見守り、野外で遊ばせる団体です。毎日着替えやお弁当を持って、ひたすら外にいます。3歳以下の親子も来るんですが好きな時に来て、一緒に活動をしている。自主保育は世田谷には4つある。自主ようちえん「ひろば」が羽根木プレーパークを中心に活動。「野毛風の子」は野毛の河原を使って活動。駒沢公園を中心に「自主保育駒沢おひさま会」。世田谷プレーパークを使って「自主保育てんとうむし」。



月に一度集まって話し合いや情報共有をしている。コロナ禍で外遊びに興味をもつ親子も多くなっていると感じている。室内はちょっとと思う親子から問い合わせが増えている。

外遊びしにくいと感じることもある。飲食が厳しくなって、花見のシーズンからシートを敷いてお弁当食べることがしにくい。パトロールする人も増えていて、子どもの遊びを注意される。公園に人が増えて遊びにくいところもある。人の目が増えるのは良いところ、悪いところもある。いろいろな遊び場でお目にかかることもあるかと思うので声をかけてください。

松田) この時代に外遊びがあるというのは自慢。自主保育には世田谷区も少し補助があります。子ども・子育て会議で予算が少し増えたとありました。幼稚園でも保育園でもないサードプレイス。

今日は保育園の園長先生たちも多く参加いただいています。園内保育の状況を話していただける先生いらっしゃいますか？

さくらのその保育園（世田谷はっと保育園）は公園に囲まれている園。緊急事態宣言時、下馬中央公園に子どもたちが密集。保育園の園庭も自然環境にあるので、外遊びに不足しているわけではないが、コロナ禍で地域の中で遠くにも行けず、地域で外遊びやお出かけをどう保障しているかということで、保育園を中心に半径1キロメートルをどう活用しているかの「GOGO Gogokinjyo Map」を保護者主導で作成。コロナ禍での子どもたちの遊びを保障していこうと保護者主導で保育園と考えた。コロナ禍でルール、規制のなかで子どもたちが犠牲になることが顕著に表れている。子ども主体に保護者も地域も取り巻く環境をつくっていききたい。一緒に地域で手を携えて子育てをしていきたいなと思ってる。

松田) 「子どもがまんなか」は、「こども我慢中」とも読めると私たちはよく言ってた。そこをどうやってまんなかにしていけるか、いつも思います。

児童館はどうでしょう？

児童館職員)

規制のあるなかで公共交通機関を使えない、ハイキング企画などができない。近くの歩いていける距離で行こうという企画がいろんな児童館でてきている。遠くの公園に行ったり、特別なものを求めているのかなと思った。

松田) 特別な場所にわざわざ行く感じとか、イベントが全部中止になる中、ちょっと歩いて行ける距離で工夫されているという話でした。ありがとうございます。

野井先生が入っていただいています。区民でもいらっしゃるということで、もっと聞きたいところですが、この後のグループタイムにむけてちょっと勇気づけられる話をお願いします。

野井) コロナ禍で大変ななか、子どもたちの外遊びにいろいろ工夫しているんだなど。一区民としての参加。5年ぐらい前、成城ホールで保坂区長と対談させてもらったことがきっかけで、世田谷にはこんないろいろな外遊びのスペシャリストがいるんだと感動したのを覚えている。今日の参加の方とは呼んでいただいてお会いしていた方も結構いるなど嬉しく思っている。

コロナで外遊びが一層必要だと思っている。例えば society5.0 ってお聞きになったことあるのではと思いますが、ギガスクール構想をあちこちで聞くと思うが、これからの時代、大事なものはある程度理解できるが、コロナ禍でつくづく考えたのは、人って人間だな、動物だなということ。

動物は動くものと書くように、元来動かないと人にも人間にもなれないというのを痛感させられた1年だった。京都大学の前の総長の山際先生ってゴリラ研究している人の著書を読むと、「そもそも人間の体は狩猟採集生活に適した体のまま」だと。女性なら1日9キロ、男性なら15キロ歩くようにできている。それなのに歩いていないと内臓脂肪たまるのは当然というようなことが書いてある。

もう一つこの1年で感じたのが、人ってやっぱり人間だな、ということ。人間は人の間と書く。人は一人で進化したわけではなく、仲間と一緒に進化してきたし、共存してきた。山際先生は、著書の中でゴリラやチンパンジーの脳は、4歳ぐらいで大人と同じ大きさに達する。人間の子どもは12歳から16歳まで成長続ける。最終的にはゴリラの3倍くらいの大きさ。つまり、頭でっかちで手のかかる子どもをたくさん持つようになったのが人類。そうすると一人では子育てできない。だからコミュニティや家族が必要になったと言っている。

人類は生きるために動いて、子育てのために協力しながら進化してきたと言える。もっと言うと、人間は、動いて人になり、群れて人間に進化していくと考えることができると思う。Society5.0とかギガスクール構想時代が来ても同じだと思うし、むしろそういう時代になればなるほど、そういうことを自覚しておく必要があるのではないかなと思う。この1年子どもたちは、動くこと群れることを自粛させられている。人類にとってこれほどの不自然ってないな、と思う。そういう意味では、この外遊びプロジェクト、ネットが極めて大切だと思うし、コロナ禍の今だからこそあれができない、これができないではなく、コロナ禍の今でもできることは何なのかという知恵を寄せ合う今日のような場はすごい大事だと思う。

20:10-グループタイム(20分くらい)

松田) 皆さんどうでしたか？

チャットにグループで話されたことをいれてください

全部のグループは無理なので、話したいグループありましたら・・・。

・中学生はコロナ前の通常の学校の様子がみえているが、今ははいつてきた小学生低学年、中学年とかコロナ禍の対策があつてからの学校生活が普通だと思っているから、当たり前の小学校の様子がわからないままの子どもの様子を話してくれる方がいた。子育て支援のつながる場がなかったり、情報の困窮とかどういうふうに子育てしたらいいのか、孤立しているという話。「いけせい」(池之上青少年交流センター)の方からは、中高生のエネルギーの話、居場所作りの難しさの話などありました。

・池之上青少年交流センターは4月から名称あらたに若者たちに寄り添った居場所、やりたいを応援、地域とつながっていく活動を展開しているところ。

グループタイムでも話したが、コロナ2年目に入って、1年目よりはいろいろできるようになって、若者たちもそういう過ごし方を経験で積み重ねている。もともと成長する時はものすごいエネルギーがでる、そういうのが日々の中で発散というのが必要だと感じるし、そういうエネルギーに満ち溢れていると日々感じている。

・子どもたちが受動的になっちゃうので、外遊びにしてもいろいろなことにしても、子どもたちの意見を聞きながら一緒に考えるバックアップを共有していけるといいねと話した。ここにいる人たちも外遊びといってもいろいろな方がいて、いろいろな方たちがやっているというのが世田谷区の特徴かなというのが出た。

団体補助金、助成金とかがないと難しいところもあるので、一部保護者だったり、一地域の人ができるではなく、例えば公共施設、公共の場所を利用申請しやすくする、無償できれいにするとか、環境設定もあるともっと広がっていくのかなと。そういう場所がなくても大人も啓発があると外遊びも広がっていくと思うので、いろんなアプローチで考えていけるといい。グループ内でお互い近い拠点同士、行き来する話にもなり、ネットワークが大事だとカップルが成立して終わりました。

松田) 飯田の人形劇フェスティバルがあり、フェスティバルをやっている数日間は町中の場所が人形劇になる。お寺とか誰かの家の軒下、老人ホームとかあらゆる場所で見ると。劇団のプロもいれば学生もいれば、家族でやっている人、高校生もいる。様々な人が上演できる。世田谷の外遊びも今はそうなのではないかと思えます。

・新潟から出てきた学生さん、新潟の実際と比べたらこんなに小さいのに、こんなに遊び場があることに驚いたという話もあった。新潟では、子どものころ公園で何か言われたりもなく、そのあたりにも驚いたという話もあった。大きなイベントはコロナでできないが、最近子どもの心が動く活動をそれぞれ工夫しているので、そういう活動を応援していこうという大人たちがつながれたり、非日常になって子どもたちの遊びの権利の大切さに改めて気づかされるなという話があった。結構ボール遊びが規制されたり、遊具が帰省されたりも多いが、そういう子どもが遊べる場は大人がつながって作っていく必要があるのではないか。最終的には子どもの声を聞くことなくして、何事も決められない、決めてはいけないので、子どもの声をちゃんと聞いていきたいね、という話でした。

松田) やはり子供の声を聞くは大事。調査した時に小学校4年か5年生が「俺らを川で遊ばせろ」という意見があって、子どもたちが川で遊べば、大人はごみを捨てないというのがあった。大人の姿をよく見えています。

#### <グループ8>

市長さんが子育て支援を止めないという話をされて、居場所は止めないという話があった。問題提起で子どもたちがやはり不満も言わなくなってきたね、という発言。どうせ中止になっているのがわかっているから期待してがっかりしたくないから、期待しない。1年もたつとがっかりもしないために期待しなくなっている。フォーマルな場所であればあるほど場所の制限というのはあるが、最後残るのは人。せめてがっかりする結果を伝えるときに、こっちも大変なんだから我慢しろとは言わないとか、諦めちゃうことを肯定させない受け答えをすることだけは最後私たち一人一人に残されたアクション。諦めない、人間であることをやめないことだけ確認して終わりました。

松田) 動物だもの。あきらめない。

カービーが来ていて、もっともっと気軽なことできないの?と書いてくれてます。

プレーカーやリヤカーはもっともっと気楽に、小さな道具を広げて、自然と集まってくる。毎日やっているとすごい関係性ができてくる。小さくてもそれぞれが自分でちっちゃい遊び場と伝える多世代でつながる場になる。庭で縁側 小さい規模でもできるのが広がっていく シモキタで定期的な小さい遊び場を展開予定

松田) 外遊びは入り口はもっと小さくても自分でできるんだということを、スペシャルな人がやらなくてもいいんだよ、ということも伝えていきたいなど。

これでグループの発表は終わりです。

最後に外プロから

植田) 外遊びプロジェクトのやっしーこと植田です。

児童館各館で、放課後の子どもの過ごし方調査をマップにしたりグラフにしている地域によって子どものあそび場の多様性が地域によって全然違うのが見えてきた。一か所に集まっている、それぞれのところで遊ぶ、遊べないなど。

今年で25館全部の調査終えたので資料として共有できる形でまとめる予定。

松田) 砧部会の近況も

上原) 月に5回ぐらいあそび場をやらせていただいています。大蔵運動公園を活動場所にして

いる。砧地域は自然が豊かな場所の魅力を生かした展開ができればいいなと思います。いろいろな人たちに関わってほしいです。Facebookで「砧地域にプレーパークを作ろうネットワーク」のページがあるので検索してください。

松田) 外遊びプロジェクトのことを理事長吉永さん、まとめとしてこれからどうしていく？など外プロの話もしてください。

吉永) この時期に区民版で外遊びをテーマにやれて本当によかったなと思ってます。

外プロ始まって3年たつが、コロナになって、せっかく外遊び推進委員のカンペーさんが来てくれたのに、少しだけ停滞してるところがあったような気がしている。今こそ外遊びだよ、と毎回声かけてくれて、植田さんの地道に続けてくれた調査結果がいろいろ出て、多様性が地域によって、すごい違うという話が出て、地域ごとにいろんな外遊びを考えていくことが必要なんだということもわかってきた。そうなる世田谷の色んな財産をそれぞれの地域ごとにさらに発展させていくというイメージがだいぶもてるようになってきたところ。上原さんと一緒に砧で新しいことが今始まろうとしているが、外プロにオブザーバーとして入ってくれた羽根木の徳田さんが、作るのって楽しいでしょう？楽しんでね、とすごく言ってくれて、少しだけ大変なことも多くて、もしかしたら上原さんも少し疲れていたかもしれないが、作ったときの楽しいことを今まさに実体験として、今も通過した人がそういう風に言ってくれたことはすごい力になると思っている。ここに集まっているいろんなバックグラウンドのあるいろいろな人たちがお互いに話して刺激しあうのが、子どもにかえっていくんだと思う。チャットで天野さんが「大人も気合を入れて外遊びのことを考えていかないとダメだよ、みたいな言葉が出ていたが、本当にそうだと思う。

今、格差の話がでていて、コロナでそれが深刻化していて、子どもの遊びの格差という大きな問題としてある。私も研究者なので少し話すと、遊びのことって実はすごい最近いろんな

ことがわかってきた。測定の色んな技術が高まってきたので、昔はぼんやり遊びは子どもに大事だよと言ってたことが、遊ぶいろんな体験をすると脳のどこがどうなるとか発達の上でどこが活発になっていくこととか、それがあることがどんなに大事かとかいろいろわかってきて、まさに最先端でやっているのが野井先生。

明確に外遊びという言葉は使っていないが、子どもたちが自発的に行動することが発達の上で非常に重要であることが分かってきている。そのことを誘発する体験というのが専門書の中に列記されているが、どう読んでも外遊び。子どもたちが発達をしていくうえで、目の前のことを存分にやるのが今を生きる子ども、そこから未来に向かう子ども、いろいろ今は少し我慢をしたり、未来のことを考えながら準備をするみたいな段階になっていくが、両方の側面に大切なのが外遊びだと読み替えることができる。なので、そんな格差をのりこえていくためにも、ごくごく身近にその自発的な行動を促す外遊びの体験ができる場をすごく努力して作っていかなくてはいけないんだと日々思っているところ。機運の状勢を行政と民間が一緒にある体験は世田谷にいっぱいプレーパークとか素敵な活動があるが、初めの段階から一緒にやるのは初めてかもしれない。途中から盛り上がってきて、行政と民間が一緒にやっていくのが多くあったパターン。まだ本当に種火のところから一緒にやっていくというのは、世田谷では初めてかもしれない。そこは是非皆さんが、こういうのがあるらしいよと口コミで広めてもらって、この活動に参加してくれる人を増やしていければいいなと思っている。

あと、私たちのグループでも出ていたが、そんなに張り切ってやらなくてもいいんだよ、適当でいいんだよと思いながら外遊びのハードルを下げてひろげていくというようなこともプロジェクトで取り組みたいなと今日は思いました。

松田) その場に立ち会えるのは今しかない。外プロのスピンアウト企画もあります  
そとあそびプロジェクト・せたがや 8月24日(火)の夜  
トークライブ:NPO 法人きぬたま たまがわ遊び村の上原幸子さんに聴く!

区民版は育成推進課としています。

<今後の予定>

9月3日(金) おでかけひろば

11月12日(金) 子どもの貧困

2月詳細未定

<チャットの書き込み>

5 グループ：

地域のつながり。保育園、学童保育のが地域と分断されている。外遊びを通した地域コミュニティー。

区内の幼稚園勤務。社会人大学院で子育て支援をテーマにした。

烏山のボランティア活動。集合住宅の共用施設でゲームをする子どもたちが気になる。

ひろばの OG。上北沢から羽根木に通っていた。羽根木 PP の世話人。住んでいる地域にコミットしている。

代田の子育て拠点運営。自分の子育て時代には外遊びの経験はあまりない。

若林の遺贈された緑地「峰松緑地」にちょっと関わっています。子どもも入れる場所になったらいいとおもっている。

外遊びは学童期？外遊びは親子が前提になっている？

こどもが遊びきることが大切だと思う。

吉永真理@そとプロ:学童でも外遊びをしたらいいのではないか

まーぶる：

瀬田二丁目公園 外遊びの日 毎月1回 毎回20組も来る

ひとと会える場としての「外」

群れる場としての「外」

外遊びができるひととあまりやってない人と組み合わせてペアで

顔見知りの人がいると安心

期待されるとむずかしい・・・頼まれるとまじめで。。

ぐりがそのやり方をやってる

最初スタッフが行って、そこでゆずっていく、というやり方。適当な見本を見せる

コロナ禍の前がわからない

国連からの勧告、子ども時代のない国は日本と韓国だけ。野井先生から

去年閉園した。

子どもたちがいい子になってるね、気になるねって声を聞く

不満を言わないコロナのせい？言えないの？言わないの？

諦める方に順応するのがノーマル

期待してがっかりしたくないから期待しない

福岡市から参加

公園遊びの制限（滑り台に紐張られていたり）最近はやうやく続々と参加してきた  
どこまで表現できてる？母たち表現できてる？

中高校生の居場所：止めたくない

市長：子育て支援を止めるな

公共施設の外で集まって×→居酒屋借り居場所実施

児童館：人数制限で運営

いい子が多い不満を言わない

コロナ始まった頃異動だったけど、中止を残念がったけど、延期に食い下がらなくなった

園庭もあるどろんこ

2年目で盛り上がりそうなところ緊急事態

空いてるのかな、空いてないのかな？？とか足踏みしながら

中止に慣れてきている

駄々をこねない

・コロナ禍で生まれた子と母

辛い時にも誰にも会わずに耐えた、人見知りかすごい家族だけで過ごす

さぞかし孤立して辛かっただろうに

人間であることを忘れない。

不満を言われた時の大人の対応

諦めさせない、どうしたらできるかを一緒に考える

・保育園で、コロナになって散歩にもいけなくなったが、それぞれの園が工夫しながら体を動かそうとしている

・非日常になって「遊びの権利」の大切さに気付かされる。ボール遊びが規制されている公園も多い。子どもが思う存分遊べる場所を増やしていきたい



・新潟に比べて小さい世田谷区に、こんなに遊び場が多いことに驚いた。新潟では、公園の周りに家があっても、何か言われたことがない。

・大きなイベントはできないけれど、地域ごとに子どもの心が動く活動をしている。子どもを応援していこうとする大人たちが繋がれたらよい

・子どもの声をきくことなくして、何も決められない、決めてはいけない！！子どもの声に耳を傾けていきたい。

大学生がオンライン中心で大変な中だからこそ、コロナでも地域でのボランティア活動は大事。

<グループ11>

コロナ渦での子ども、子育て期の変化

出産→子育て

子育てについて聞けない

今まで肌感覚でわかっていたことがわからない

母親はLINEを使ったり相談したり

最近引っ越してきた方や引っ越しが多い。

親が手伝えない→実家近くに引っ越し

小学1年生は窮屈さをあまりわかっていない

プールもしゃべれないし叫べない

子どもは結構順応している

お父さんと子どもが外に出てくる機会が増えた

家族の関係が密になった

お父さんを巻き込む機会になっている

そとプロ／きぬたま 上原 から全員に: 08:40 PM

大学生がオンライン中心で大変な中だからこそ、コロナでも地域でのボランティア活動は大事。

### 【話したテーマ】

このコロナ禍のなかで、外遊びのために大人はどんなことができるのか。

・移動式の遊びはさまざまな人がつどう、小さな遊び場をたくさんつくと良いとおもう。

・移住した村(?)では、地域が本当に子どもを大切にしてくれている。そういうものが東京でもつくることのできてば。

- ・保護者は高学年で地域から離れていく。それをつなぎとめる工夫も必要ではないか。
- ・居場所を知られていないこともある。
- ・シャボン玉など比較的ハードルのひくいイベントなどをやるときもある

子どもの遊びに権利の

子どもの声をきくことなくすすめられない

日本は子ども時代を保障しなさいと勧告がでている。

幼少期から習い事詰めになる環境をどうにかしていきたい。

<グループ1>

野井先生

学校だけでは居場所にならない

放課後が大事だと思っている

児童館・学校・学童など

横のつながりがあっても監視するわけではなく、みんなで見守る

よその子と繋がる

エデュケーション＝教育

ラテン語の語源＝育てる

教えるという意味ではない

育てる→その子の能力をどう引き出すか

教える→教え込みすぎると自分で考えられなくなる

放課後の方がエデュケーションされているのではないか

- ・日本は子ども時代を保障しなさいと勧告がでている。
- ・幼少期から習い事詰めになる環境をどうにかしていきたい。

上祖師谷ばる児童館 M氏 から

七夕の短冊に、「千歳台に土地が欲しい」と書き続けています。もらえたら子どもたちと竪穴式住居を作るので、どなたかください笑

<ルーム6>

- ・プレーカーやリヤカーでなくても、もっと手軽で小さなオカモチやバックなどに廃材や材料をいれて、公園や空き地、お庭や道をミニあそび場をつくる(運動?)
- 小規模だけど毎日やることで子ども&おとなもつながる

- 子育て世代や子どもの活動団体以外の人とつながる
  - 地域として「子どもの外遊びって大事だよ」と共感
  - 場やモノやノウハウ・・・をシェアするしくみ
- あそびあふれる社会をつくろう！！

#### <グループ7>

- ・コロナでも保障すべきは、保育サービスではなく、子どもの育ちの環境。  
学童卒までの間、親は無自覚にサービスを受け慣れてしまっている環境にある。親もサービス受益者としてではなく、地域ぐるみの子育ての一員として関わっていけることを、区全体で取り組んでいって良いことなのでは？
- ・外遊びは0・1・2歳までに経験すべき育ちの礎。  
親も、外遊びの大切さを学ぶ必要。小学生になってからでは、子どもの外遊びを親がとめてしまう傾向もある。
- ・はいはいをせずたっちしている子が多い。室内で過ごす時間が増えたから。
- ・自主保育他の子どもも見る貴重な体験ができた。学校に行き始めてからやっではいけないことやルールがあることに驚いている(小1の子)。学校休んで、大きな木保育園に行ったりした。その場にいる大人や受け入れてくれる環境に安心して、また学校に行ったりしていた。烏山プレーパーク、こども自身が「ここに入ってもいいのかな？」という雰囲気があった。ここで遊んだら思い切り遊べるのに。児童館への放課後調査。児童館は密になるから心配。外ならいいよという親の声。外遊びが少し増えた？
- ・コピープロさん。外遊びを事業化しようとしています。もっと詳しく聞きたいです！
- ・幼保無償化が始まってから、自主保育の新規メンバーの募集が難しい面も。